

08・不思議の国の楽園じゃない場所

本編『07・楽園の入り口（わたし、あるいはあたしの望み）』から数時間後。
とある年の春。

五月二十八日。十五時近く。

場所とはある駅。目的地までの乗り換えがある駅。

天気は晴れ。室温は二十三度程度。

今日も素晴らしい気候だ。

SE1 汽車の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0—20秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【場面転換するまで流し続ける】

主人公、目的地まで移動しながら、様々な事を考える。

ミネルヴァと出会ってから今日までに起きた出来事、彼女と交わした言葉、彼女が自分にしてくれた事。

それらを反芻しながら、無事再会できた時、どんな話をするべきか考える。

主人公は、こう考える。

ミネルヴァが自分を哀れに思い『助けてあげよう』と思った事自体は、自然な事だ。

と。

それは、ミネルヴァの優しすぎる人柄もあるし、事実、出会った当時の自分があまりにも何も持っておらず、心身ともに弱り切っていたからだ。

主人公はその、己の『何も持ってなさ』が苦しい。

結局のところ、それが全ての原因のように思えるからだ。

仕事もない、お金もない、友達もほとんどいない。

研究ばかりで人生経験に乏しく、何かあればすぐ感情的になって人とぶつかり、いつも禍根の残る終わらせ方しかできない。そのせいで人とのつながりが希薄で、まるで好かれる人間性をしていない。

人より少しは賢い事だけが誇りだったが、就職先では一週間も経たずに問題を起こし、業界では目を付けられる側になってしまった、もはや魔法薬師としての復活の目さえ危うい。

以前も同じような事を考えた気がするが、それも当然だ。

主人公は自分を、このようにしか評価できない。何をやっても、どれだけ尽くしても、いまだに自分は、ちっとも社会に適合できないのだ。

——そんな自分を、たった一人の親友と、初めて恋した人が『魔法薬学試験に通す事で『立て直そう』としたのは、ごく当たり前の事に思える。

……そう。

ミネルヴァはわたしが、こんな現状から這い上がるために、あの薬をくれた。自分で生成した薬の権利を譲ってまで、わたしの人生を救おうとしてくれた。

……なのにわたしは、どうしてもそれを受け取る事が出来なかった。

彼女がどんな気持ちで薬を渡してくれたのか。それをわかっているのに、それでもなお、受け取らない道を選んでしまった。

ミネルヴァはあの音声で『嫌われても仕方ない事をしている』と言った。けれど、それはわたしも同じだわ。

これからミネルヴァの宿泊先まで、のこのこ会いに行つて。

『受験しない』『贈り物は受け取れない』と言ったら。

ミネルヴァは、今度こそ失望するかもしれない。

『また、私の気持ちを受け取ってくださらなかったのね』とがっかりして、今度こそわたしを嫌になるかもしれない。

……だって、誰だって。

心を込めて選んだプレゼントを突き返すような女より。

素直に喜んで『ありがとう』って受け取る女の子の方が、好きだと思うから。

そこまでわかつているのに、わたしはそうはなれない。

初めて好きになった人に位従順でいればいいのに、それすらもできない。

この期に及んで、自分の心に逆らう事ができない。

〈主人公〉

「ううっ……」

主人公、スカートの裾を握りしめ、うつむく。

するとそこへ濃い色のしみができ、それは広がるだけでなく幾重にも広がり、また増え続けていく。

視界に移るのは、ミネルヴァが選んでくれた服と、植物の彼女がセットしてくれた髪

毛と化粧だ。

それだけではない。

こんな事になって尚身体の調子がいいのは、液体の彼女が惜しみなく栄養を注いでくれたからで。

何とか気持ちを保っていられるのは、石の彼女と接するうち、少しは自分に自信を持てるようになったからだ。

つまり今の自分は、何一つ自分で作り上げたものではない。

ミネルヴァの愛情と献身で、主人公は今日を健康に生きていられるのだ。それなのに自分は、この格好で、この身体で、この心で。

『あなたの厚意は受け取れない』と言いに行く。

何と恩知らずで、相手の気持ちを考えられない女だろう。

そうとわかっていのに、主人公はこの道を選んでしまった。

また大切なものを失うかもしれない。今度こそ自分は取り返しつかない事をして、誰よりも大切な人と、生まれて初めての恋を失うかもしれない。

そう思いながら、彼女のいる場所へ向かっている。

SE 2 汽車の停車音

【最初から最後まで流す】

SE 3 主人公が椅子から降りる音

【最初から最後まで流す】

SE 4 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

SE 5 主人公が汽車の扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

SE 6 主人公が下車する音

【最初から最後まで流す】

そんな事を考えるうち、汽車は目的地へ到着する。

主人公は下車すると、構内へ出ていった。

大きめの駅。人がそれなりにおり、ざわざわしている、非常に広い空間。

SE7 駅の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【SE1と切り替わって流す】

【0―3秒ほど流してSE8】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【場面転換するまで流し続ける】

SE8 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0―20秒ほど流して『ミネルヴァ』のセリフ】

そして、主人公が外へ向かって歩いていると……。

▲ ボイス加工あり

【10メートルほど離れた位置から聞こえる】

「フェードインする」

「とても気になる内容なので、主人公が思わず近づいていき、その結果声が近くなるイメージで」

「だんだん近づいてくる」

〈駅職員〉

「ミネルヴァに話しかけている。

真剣に、丁寧に、寄り添うように。

精一杯ミネルヴァの心情に寄り添おうとしているので。

先程ミネルヴァから、衝撃の困り事を打ち明けられたので。

駅職員は、就職してまだ間もない新人女性職員である。

年齢は二十二歳で、主人公と同じ。

かわいらしく親しみやすい印象で、ミネルヴァでも、何とか自分から話しかけられたのは『主人公と同年代の、話しかけやすい雰囲気的女性』だったというのが大きい」

……然様（さよう）でございましたか……！

心中（しんちゆう）お察し致します。

それは大変お困りで、ご不安に感じておられますよね……」

▲ ボイス加工あり

「8メートルほど離れた位置から聞こえる」

「とても気になる内容なので、主人公が思わず近づいていき、その結果声が近くなるイメージで」

「だんだん近づいてくる」

● 正面 50センチ

「【※沈んだトーンではあるが、どこかコミカルに※
駅員に話しかけている。

とても困り果て、泣きそうで、あわあわしながら。

トラック04のミネルヴァに近いが、より、もう一段階感情があるイメージで。

ミネルヴァは主人公との交流により、主人公以外と接する時にも感情表現できるように
なってきたので」

ええ……そうなの。そうなのよ……。

貴方、何かご存じないかしら……」

駅員室の前に、ミネルヴァがいた。

主人公、目の前の光景が信じられず一瞬ぼかんと立ちすくむが、間違いない。

あの後ろ姿、あの服装。

そして何より、あの弱り果てた声。

主人公はあの声を聞いた事がある。それを愛おしいと思って、口づけをした事がある。
……絶対に間違えるはずがない。

▲ ボイス加工あり

「5メートルほど離れた位置から聞こえる」

「とても気になる内容なので、主人公が思わず近づいていき、その結果声が近くなるイメージで」

「だんだん近づいてくる」

〈駅職員〉

「ミネルヴァに話しかけている。

真剣に、丁寧な、寄り添うように。

しかし、ミネルヴァがあまりにも慌てているのと、まだ新人であるせいで、自分もつられてくる」

はい……私共（わたくしども）としても、お客様のお悩みを解決すべく、最大限お手伝いさせて頂きたいと思っております。

「とても言いにくいですが、勇気を出してはつきりと言う。

しかし、とにかく言いにくい。自分もすっかり困り果てた様子で謝る。

ミネルヴァは先程自分に『落とし物をしてしまった』と相談にやって来た。

そこで駅職員は、背後にいる他の職員にも頼んで一緒に探し続けた。

しかしどうしても見つからず、とうとうこう言わざるを得なくなってしまったので」

しかしながら、大変申し訳ございません……！
そのような落とし物は、今の所届いてませんようで……」

▲ ボイス加工あり

「3メートルほど離れた位置から聞こえる」

「とても気になる内容なので、主人公が思わず近づいていき、その結果声が近くなるイメージで」

「だんだん近づいてくる」

● 正面 50センチ

「※沈んだトーンではあるが、どこかコミカルに※
駅員に話しかけている。

とても困り果て、泣きそうで、あわあわしながら。

トラック04のミネルヴァに近いが、より、もう一段階感情があるイメージで。

ミネルヴァは主人公との交流により、主人公以外と接する時にも感情表現できるように
なってきたので。

また、二人が力を尽くしてくれ、かなり遠い遺失物コーナーまで行ったり、駅内をくま

なく歩いてくれたりしたのを知っているの。

『あちらの方』とは、駅職員の後ろにいて、事態をはらはら見守っている男性職員の事』
そう……そうよね……。

貴方もあちらの方も、とても沢山、探して下さったものね……。

【※沈んだトーンではあるが、どこかコミカルに※
ますます困り果て、泣きそうで、あわあわしながら。

『探し物が今のところ見つかっていないという事はわかった。納得している。だが、それはそうとして、自分は どうしたらいいだろう？』という意味で言っている。

頭では『こんな事を尋ねても仕方ないわよね。ますます彼女たちを困らせるだけだわ』とわかっていてなお、聞かずにはいられないほど混乱しているの』

……でも。

ど。どうでしょう……？」

▲ ボイス加工あり

【2メートルほど離れた位置から聞こえる】

【とても気になる内容なので、主人公が思わず近づいていき、その結果声が近くなるイメージで】

【だんだん近づいてくる】

〈駅職員〉

「ミネルヴァに話しかけている。

思わず素になるほど驚き、ぽかんとして。

まさか、そう尋ねられるとは思っていなかったのて

えっ。

あっ。

【質問されているのに、質問し返してしまう。

すっかり頭が真っ白になっているので。

職員として『どうしましょう？』などと言っている場合ではないのだが、すっかりミネルヴァにつられている。

自分でもすっかり困惑してしまっ

てどうでしょう……？」

〈主人公〉

「……あの」

▲ ボイス加工あり

【1メートルほど離れた位置から聞こえる】

「とても気になる内容なので、主人公が思わず近づいていき、その結果声が近くなるイメージで」

「だんだん近づいてくる」

〈駅職員〉

「主人公に話しかけている。

ものすごく驚いて、素っ頓狂な声を上げる。

まさか、ここでさらなる別の客が声をかけてくるとは思っていなかったのですね？」

こうして主人公は、とうとう意を決して話しかけた。

すっかり話に夢中になり、ここまで近づいて尚主人公の存在に気づかない二人に、おそろおそろ声をかけた。

〈主人公〉

「……恐れ入ります。この方は、わたしの連れなのですが……。

彼女に、何かございましたか？」

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

〈駅職員〉

「主人公に話しかけている。

ものすごく驚いて、素っ頓狂な声を上げる。

まさか、ここでさらなる別の客が声をかけてくるとは思っていなかったのだ」

へっ？

「素の低い声で。

まだ事態が飲み込めず、混乱気味の声で」

あっ。

「言葉にならない声を上げつつ、ここでようやく事態を理解する。

『今話しかけてきた女性は、落とし物をした女性の連れらしい』と、ここでようやくわかったのだ」

あ……？

「※大きく息をのんでから※ 話す。

ものすごくホッとした、嬉しそうな様子で。

『お連れ様』とは主人公の事。

連れがいるという事は、落とし物をした女性、つまりミネルヴァはそこまで深刻な事態にはならないかもしれない、と思えたのだ」

ああ……！ お連れ様でしたか！

「しかし、みるみるうちに声が暗くなっていく。

喜んでいる場合ではないと、すぐに気づいたので。

『お客様』とはミネルヴァの事。

主人公にこの事実を伝えるのは忍びなく、とても申し訳なく、言いにくいので」
実はですね……その。お客様が……」

〈主人公〉

「……………」

主人公、少々、いや、かなり気まずいまま、小さく頷く。

ここまでの会話を背後から聞いて、ミネルヴァに何があったのかはおおむね理解した。
うん、確かに、ミネルヴァには起こり得そうな事である。

ミネルヴァは一つの事に集中すると、他の事がおろそかになる。

その結果……おそろく……。

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「※沈んだトーンではあるが、どこかコミカルに※
観念して、素直に現状を打ち明ける。

ものすごく申し訳なさそうに。

今は見栄や意地を張っている場合ではなく、素直に主人公に助けを求めなくてはまずいとわかってるので」

……お財布を無くしてしまったの。
御免なさい……。助けて下さる？」

『何か、重要なものをなくしたのだろう』

主人公の予想は見事的中し、ミネルヴァが申し訳なさそうに頭を下げる。
だから主人公は、

ああ、追いかけてきてよかった——……。

と、ほっと胸を撫でおろした。

一度フェードアウトする。

約一時間後。十六時ごろ。

主人公とミネルヴァ、本日ミネルヴァが宿泊する予定だったホテルの廊下を歩いている。お財布布に関してはひとまず『もし見つければ、こちらの連絡先に連絡してほしい』と伝えるにとどめ、まずは明日の学会の為にホテルに向かう事にしたのだ。

そんな二人は一緒に歩いてはいるものの、様々な意味で気まずく、会話がないう。そのまま部屋の前まで到着し、二人は入室する。

SE9 ホテルの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0—5秒ほど流してSE10】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【場面転換するまで流し続ける】

SE10 主人公とミネルヴァの足音

【最初から最後まで流す】

SE 11 ミネルヴァがホテルの部屋のドアの鍵を開ける音

【最初から最後まで流す】

SE 12 ミネルヴァがホテルの部屋のドアを開ける音

【最初から最後まで流す】

SE 13 ミネルヴァがホテルの部屋のドアを閉める音

【最初から最後まで流す】

SE 14 主人公がホテルの部屋のドアの鍵を閉める音

【最初から最後まで流す】

そしてそのまま、重苦しい雰囲気で入室するが……。

SE 15 ミネルヴァがソファにへたりこむ音

【最初から最後まで流す】

▲ ボイス加工あり

〔1メートルほど離れた位置から聞こえる〕

● 正面 50センチ

「【※ものすごくホツとしたトーンではあるが、どこかコミカルに※泣きそうなほどホツとした様子で。

例のごとく、ミネルヴァは一度に一つの事しか考えられない。

そのため今は『お財布を無くしてもものすごく不安だったが、主人公さんのおかげでどうかホテルまでたどり着く事ができたわ。主人公さんには、感謝の気持ちしかないわ……』という状態である。

そのため『なぜ主人公がここにいるのか』という事に頭が行っていない。完全に意識していないわけではないのだが、その話題に移る事がまだできないのだ。

先ほどまで無口だったのも、気まずいのもあるが『何とかしてホテルまでたどり着く』という事しか考えていなかったためである」

ああ……。

やっと。やっと、辿り着けた……!」

部屋の鍵がかかるなり、ミネルヴァがソファにへたりこんだ。

主人公、その仕草に少々驚くが、すぐに、なんだか笑顔になってしまう。

……なんだ、いつものミネルヴァだわ。

わたしはどうしたってこの人の事が、可愛くて、愛おしい。

そう思うと自然と緊張が解け、普段通り話せるような気がしたのだ。

そうなると、声もおのずと優しくなる。

主人公は、まるで何事もなかったかのようにミネルヴァに話しかけた。

SE16 主人公が荷物を置く音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……ええ、本当に良かったわ。

これで一安心ね」

●正面 50センチ

「【※ものすごくホツとしたトーンではあるが、どこかコミカルに※

※しかし、コミカルすぎずに。この次のセリフから、真面目なトーンに戻していくので、自然にそちらへ寄せていくイメージで※

主人公への、心からの感謝を述べる。

泣きそうなほどホツとした様子で。

例のごとく、ミネルヴァは一度に一つの事しか考えられない。

そのため今は『お財布を無くしてもものすごく不安だったが、主人公さんのおかげでどうにかここまでたどり着けた。主人公さんには、感謝の気持ちしかないわ』という状態である。

そのため『なぜ主人公がここにいるのか』という事に頭が行っていない。完全に意識していないわけではないのだが、その話題に移る事がまだできないのだ。

先ほどまで無口だったのも、気まずいのもあるが『何とかしてホテルまでたどり着く』という事しか考えていなかったためである」

ええ。ええ……！

ありがとう。

貴方が来て下さらなかったら、どうなっていた事か。

本当にありがとう……！」

〈主人公〉

「……そうよ。もう大丈夫。

怖かったでしょう。でも、もう大丈夫よ」

主人公、今にも泣き出しそうなミネルヴァがすっかり可愛くなってしまっていて、いつものように近づく、優しく抱きしめる。

ミネルヴァ『正面50センチ』から『左0センチ』に移動して話す。

SE17 主人公がミネルヴァを抱きしめる音

【最初から最後まで流す】

SE18 主人公がミネルヴァの背中をぽんぽんする音

【最初から最後まで流す】

● 左 0センチ

「主人公への、心からの感謝を述べる。

泣きそうなほどホッとした様子で。

例のごとく、ミネルヴァは一度に一つの事しか考えられない。

そのため今は『お財布を無くしてもものすごく不安だったが、主人公さんのおかげでどうにかここまでたどり着けた。主人公さんには、感謝の気持ちしかないわ』という状態である。

そのため『なぜ主人公がここにいるのか』という事に頭が行っていない。完全に意識していないわけではないのだが、その話題に移る事がまだできないのだ。

先ほどまで無口だったのも、気まずいのもあるが『何とかしてホテルまでたどり着く』という事しか考えていなかったためである」

うん。貴方がいるものね。もう怖くないわ。

ありがとう……」

〈主人公〉

「そう。よし、よし。もう大丈夫よ」

こうして二人はこのまま、元のような雰囲気に戻るかのように思えた。

主人公自身、どこかそれを期待して、ミネルヴァを抱きしめた節があった。

しかしここでミネルヴァは、とある事に気づいたようだ。

ミネルヴァ、会話するため、『左0センチ』から『正面30センチ』の距離に戻る。

SE19 ミネルヴァが主人公から離れる音

【最初から最後まで流す】

● 正面 30センチ

「【とても申し訳なさそうに。

おずおずと、だが『これは尋ねなければならぬ』という面持ちで。

ミネルヴァは、無事ホテルに到着した事、主人公に抱きしめてもらった事で、すっかり
落ち着きを取り戻した。

そして『なぜ主人公がここにいるのか』という、今一番聞かなければいけない問題に向
き合う事にしたので」

……あの。

でも……。

貴方は何故、駅にいらっしゃったの？

試験の事は……如何（いかが）なさったの？」

〈主人公〉

「……………」

もし、このまま何事もなく、いつもの二人に戻れたのなら。

一度は夢想した事は、やはり現実にはならなかった。

落ち着きを取り戻したミネルヴァはいつも通り、思ったままを口にする。

それからすぐにとっても心配そうな顔になって、主人公を見つめてくる。

その表情は、今二人の前にあるものが、ただ甘く優しくキスして、抱き合えば解決する問題ではない事を教えてくれる。

● 正面 30センチ

「【とても申し訳なさそうに。

かつ、真剣な面持ちで。

ミネルヴァ自身、ここまで来るにあたって、『主人公がここに居る理由』について、全く想像しなかったわけではなかった。

しかし『主人公と向き合わなければならない』というつらい事態と向き合うのが困難で『ひとまずホテルにたどり着く事』に集中していた節があるので」

……そうよね。

私に何か、伝えたい事や……聞きたい事があっていらしたのよね」

〈主人公〉

「……ええ、そうよ。

おっしゃる、通り。

わたしはあなたに、お伝えしたい事、お聞きしたい事があって、ここにいます」

主人公が頷くと、ミネルヴァが真剣な目でこちらを見据える。

そしてローテーブルをはさむ形で置いてあるソファに視線をやると……その向かい側に座るよう促した。

SE20 ミネルヴァが主人公から離れる足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかる】

ミネルヴァ、『正面30センチ』から『正面50センチ』まで離れる。

● 正面 50センチ

「【とても真剣なトーンで。

これまでになく重苦しく、覚悟を決めた面持ちで。

言葉の通りどんな事でも聞かし、話すし、その結果、主人公に嫌われても仕方ないという覚悟で話しているの〜

承知したわ。貴方には聞く権利があります。

どのような事もお聞きするし、どのようなご質問にもお答えするわ。

…そちらへおかけになって

〈主人公〉

「…わかったわ」

SE 2 1 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

SE 2 2 主人公がソファに腰かける音

【最初から最後まで流す】

SE 2 3 ミネルヴァがソファに腰かける音

【最初から最後まで流す】

こうして二人は向かい合って座る形になり、対峙した。

こんな緊張感の下話すのは、面接の時以来だろう。

だがあの日とは、二人の関係は何もかもが違う。

あの時とは比べようもなく、主人公はミネルヴァの事を知って……。

まだ知らない事が、いくらでもあるという事実に苦しくなるほど。

ミネルヴァを好きになってしまっているからだ。

〈主人公〉

「……まず、既にお察しの事とは思いますが……。

ごめんなさい。今回は受験しない事にしたわ。

プレゼント、本当にありがとう。すごく……嬉しかった。

でも、受け取れない。

……本当にごめんなさい」

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「沈痛だが、真剣な面持ちで頷く。」

『おそらくそうだろう』と想っていたので」

……うん」

SE24 主人公がミネルヴァからのプレゼントを、テーブルに置く音

【最初から最後まで流す】

主人公は重苦しい雰囲気の中、今の胸中をミネルヴァに伝えていく。
今、本当に話すべき事を、切り出す時が来た。

〈主人公〉

「……わたしはあなたが、どんな気持ちでこちらを用意して下さったのかを知っている。
すべてわたしのためののだと、わかっている。

……だけど、それでも……これを頂く事はできない。

あなたの努力の結晶を、奪う事はできない。

『これは自分で作った』と胸を張れないものを、わたしは課題薬として提出できない。
……本当にごめんなさい。お返しします」

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「落ち着いた、真剣な面持ちで頷く。

聞き手が『思った以上に、意外とミネルヴァは落ち着いているな』と思わせる感じで。ミネルヴァ自身、こうなる事はわかっていたので。

受け取ってもらえなかった事はとても残念だが『主人公さんらしい選択だわ』と
思っているのだ」

うん。貴方ならそう仰ると思ってた。

謝る必要なんてないのよ。

貴方と、クロエさん。それから倉庫の方は。

皆（みんな）、私の勝手な行動に付き合わされただけなのですから。
どうか、気に病まないで頂戴ね」

〈主人公〉

「……………」

……………ありがとう。

……………では、次に、一つ質問してもよろしいかしら」

本当は今、主人公は泣き出した意図も思った。

涙を流す事で甘えて『やむを得ず恋人の厚意を受け取れなかった女』になって、話をここでおしまいにする。

そんな下劣な女になれたら、どんなにいいだろうかと思った。

だが、本題はここからだ。

主人公は次の質問に移行する。

▲ ボイス加工あり

【1メートルほど離れた位置から聞こえる】

● 正面 50センチ

「【※小さく息を吸って吐いてから※ 話す。

落ち着いた、真剣な面持ちで頷く。

聞き手が『思った以上に、意外とミネルヴァは落ち着いているな』と思わせる感じで。

今度は、どのような質問を受けるのか、ミネルヴァ自身わかっていない。

だが、それがどのようなものであるかと、もう、答えると決めているので」

……ええ。

私になぜこうしたかについて、お聞きしたいのよね。

どうぞ。どのような事でもお答えします」

〈主人公〉

「……では、お聞きするわ。

ミネルヴァ……あなた。

自分の薬の権利を譲渡するのは、これが初めてではないのでしょうか？」

▲ ボイス加工あり

〔1メートルほど離れた位置から聞こえる〕

● 正面 50センチ

〔※息づかいのみ※ で表現する。〕

少し驚いた様子で〕

……。

〔少し間をあけてから。〕

落ち着きつつ、少し感心した様子で。

だが、すんなり認める。

まさか主人公がそこまで知った上で質問してくるとは思わなかったの。

主人公は自分のところに来るまで、ミネルヴァ自身についてほとんど知らなかった。なので当然、薬の権利がらみの事についても何も知らないだろうと思っていたので〕

ああ……もう、そんな事までご存知なのね。
クロエさんから聞いたの？」

一瞬の沈黙の後、ミネルヴァが口を開く。

その姿は、もはやこれから何を尋ねられるのか、すべて理解しているような様子だ。
であれば、尚更主人公は戻れない。

自分なりに導きだした推測を、すべて語る決意を固める。

〈主人公〉

「いいえ、先ほど、彼女と一緒に。」

話しながら……この結論に至った」

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「【落ち着いた、真剣な面持ちで頷く。

聞き手が『思った以上に、意外とミネルヴァは落ち着いているな』と思わせる感じで。
ミネルヴァ自身、こうなった事は意外ではあるが、もう回答すると決めているので」

なるほど……過去の私の情報と、今回の私の行動から……お二人でこの答えに行きついたのね。

【少し間をあけてから】

ええ、仰る通りよ。

これが初めてではないの。

私は過去に、これを何度も繰り返して……今に至る」

〈主人公〉

「……………」

その告白に、呼吸が止まりそうになる。

やはりそうだったのかという思いと、そうでなければよかったのという思い。それらがないまぜになって、主人公から言葉を奪っていく。

▲ ボイス加工あり

【1メートルほど離れた位置から聞こえる】

● 正面 50センチ

「【少し悲しげに微笑む】

ふふ。

【落ち着いた様子で。

だが、少し淋しそうな、どこか残念そうな様子で。

ミネルヴァ自身、自分の行いは理解されがたい事なのだとわかっている。

当然、主人公のような女性にも理解されない事はわかっていた。

だが、いざそれを目の前で実感させられると、やはりとても淋しくなるので。

これまで感じていた、主人公と身も心も一つになるような全能感が、錯覚であったと思
い知らされるので】

『なぜ?』というお顔ね。

うん……貴方には理解しがたい事なのだと思う。

【少し間をあけてから】

そうする理由は、いつも同じよ。

傍にいて下さる方に、私なりのお礼がしたかったの」

〈主人公〉

「……………」

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「落ち着いた様子で。」

だが、少し淋しそうな、どこか残念そうな様子で。

淡々と過去の出来事を語る。

主人公に自分の行いが理解されない事はわかった。

だが、それでも、理解されるための努力をしていたと思っているので。

また、プレゼントの一件から、自分には説明する義務があると思っているので」
既にご存じの通り。

私は、人間の身体だけではなく、切り分けた別の自分を持つ、一般的とは言えない魔法を使う、魔女です。

行使する術も……とても『ふつう』とは言えない。

【声のトーンがワントーン下がり、より淋し気になる。

今までずっと、自分にそう言い聞かせながら生きてきたので。

『誰も近寄らないのも、一人でいるのも当たり前と納得していても、やはり淋しい』という感じで」

だから、誰も近寄らないのが当たり前。

一人でいるのが当たり前で、それも仕方のない事だと思って生きてきたわ。

「声のトーンが少しだけ戻る。

主人公をあまり心配させたくないの。

こういった淋しさを抱えつつも、自分なりに希望を抱き、前向きに生きてきた事を主人公に伝えたいの」

……でも、そう思いながら、本当はずっと、誰かと仲良くなりたくて。

誰かが声をかけてくれると。

『弟子になりたい』『力を借りたい』と言ってくれると。

凄く嬉しくて。

その人の為に、自分ができる全ての事をしようとして……

【声のトーンがワントーン下がり、より淋し気になる。

努力はしたが、いつもうまくいかなかったの」

でも……いつも失敗した」

〈主人公〉

「……だから、弟子や助手を志願する者が後を絶たなくても。

一人のスタッフが、長く続かなかったという事？」

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「【落ち着いた様子で。

だが、少し淋しそうな、どこか残念そうな様子で。

淡々と過去の出来事を語る。

主人公に自分の行いが理解されない事はわかった。

だが、それでも、理解されるための努力をしたいと思っているので。

また、プレゼントの一件から、自分には説明する義務があると思っているので」

ええ。その通りよ。

これまで『弟子や助手になりたい』と仰り、家（うち）にいらした方がいても。

誰も長く留まられなかったのは、それが理由。

私の愛情表現が、いつも間違っていたから。

私が誰かの為に何かをしようとすると、最後には、皆（みんな）居なくなってしまうの」

〈主人公〉

「……そんな……!」

ミネルヴァの口ぶりは、淋しく、あきらめたような響きをしている。

完全にそうと確信して、他の解釈などありえないような声をしている。
だから主人公は反論しようとするが、ミネルヴァは小さく首を振って続けた。

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「【落ち着いた様子で。

だが、少し淋しそうに。

主人公の言葉をそつと遮るように小さく首を振った後、続ける。

淡々と過去の出来事を語る。

主人公に自分の行いが理解されない事はわかった。

だが、それでも、理解されるための努力をしたいと思っているので。

また、プレゼントの一件から、自分には説明する義務があると思っているので」

これも、ご存知の事だとは思えれど。

私の所へ来るのは大抵、高い志をお持ちだけれど、思うような成果を出せずにいたり。

アカデミーや国研（こくけん）にはなかなか認められなかったりして、苦しい生活をさ

れている方がほとんどなの。

「少し間をあけてから。

少し言い出しにくい事でもあるので」

……私は、そんな方々の手助けがしたかった。

わざわざ『変わり者』と。『付き合いにくい』と評される私の所へいらして下さった方に、何らかのお礼がしたかった」

〈主人公〉

「だから、彼らの生活を楽しんだり、今後の研究の足掛かりにしたりするために、ご自分の研究の成果を……？」

質問する声が震える。

ミネルヴァは首肯し、また続ける。

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「【落ち着いた様子で。

だが、少し淋しそうに。

淡々と過去の出来事を語る。

主人公に自分の行いが理解されない事はわかった。

だが、それでも、理解されるための努力をしたいと思っているので。

また、プレゼントの一件から、自分には説明する義務があると思っているので」
そうよ。

私は私の弟子さんや、助手さんになって下さった方の暮らしを楽にしたり、今後の研究の足掛かりにしたりして頂く為に、いつしか、自分の研究の権利をお譲りするようになった。

【少し間をあけてから。

過去の弟子や、助手の事を思い出しながら話しているイメージで】
色々な方がいらっしゃったわ。

笑顔で受け取って下さったけれど、次の日には姿を消された方。

『ごめんなさい』と泣きながら、国研に提出して……成功を収めた方。

【少し声に感情がとまり、少し泣きそうになる。

この『凄く怒った人』は、主人公にどこか似ているので】
凄く怒った方もいたわ。

『なぜ、こんな事を』と言って。

……突き返されて、そのまま去られた。

【さらに少し声に感情がとまる。

今度は悲しい、悔しい、残念だという感情がにじむ。

この『凄く怒った人』は、主人公にどこか似ているので。

また、そんな彼女を、自分は助ける事が出来なかったのだから――

今思うとその人、少し貴方に似ていたような気がするわ。

とても真面目で、優しくて。

でも、そのせいで沢山の物を失ってしまった方だった――

〈主人公〉

「……………」

その時、言葉が出なかったのは『ミネルヴァの言う事が正しい』と『きっと私と彼女は同類だ』と思ったからではない。

なぜなら、とても真面目で優しい人間は、ミネルヴァの想いをむげになどしない。

つらい過去をわざわざ暴いて話させて、全てを知ろうとなんてしない。

主人公は今も昔も、ただ自分のしたいように生きているだけだ。

ミネルヴァの言う『彼女』とは、きっと全く別の生き物だろうと思った。

7秒ほど沈黙。

▲ ボイス加工あり

【1メートルほど離れた位置から聞こえる】

● 正面 50センチ

「【落ち着いた様子で。

当時考えた事を述べる。

ミネルヴァは、相手にも問題がある可能性……たとえば『うわさを聞き付けた悪い人間が、最初から権利目的で近づいた』というパターンを全く考えていない。

相手が去ってしまったのは、全て自分に責任があると思っている。
なので、このセリフのような結論に至っている」

でも、その時うまくいかなかったのは、私が、その方の事をちゃんと理解できていなかったから。

その方が本当に欲しい物を、差し上げられなかったからだろうと思った。

【少し間をあけてから。

ここからセリフ終わりまで淡々と、だが、だんだん強い決意がにじんでいくようなイメージで】

だから私は、そんな自分を恥じて。

今まで悲しませてしまった方々に、とても申し訳なく思ってた。

【少し間をあけてから】

……そして、次こそは失敗するまいと思った。

【少し間をあけてから】

もし次に、私を選んで下さる方が現れたら。

その方がもし、とても辛い思いをしていたなら。

今度こそ絶対に、私が助けると。

【少し間をあけてから。】

淡々としているが、確信を持った声で。

ミネルヴァはこの点に関して間違いないと思っているので】

……私には、その力があるから」

〈主人公〉

「……………」

そこまで話し終えたところで、ミネルヴァがこちらへ向き直る。

その瞳は相変わらず宝石のように美しく、そこが見えないほどに深くて、強い意志を持って向き合わなければ、今も流されてしまいそうだ。

だから、主人公も正面からミネルヴァを見た。

初めてあの屋敷で目覚めた時のように、彼女を見た。

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「【落ち着いた様子で。

だが、少し悲しそうに。

それでも淡々と、堂々と、主人公を見つめる。

たとえ主人公の理解を得られなかったとしても、自分は自分なりにきちんと説明した。
あとは、主人公の判断に委ねるしかないと思っているので」

これが、貴方に薬と推薦状をお渡しした経緯（けいい）です。

【少し間をあけてから。

落ち着いた、淡々とした口調の中に、少しずつ感情が、主人公への想いが混じり始める。
今日までの主人公との思い出を反芻しながら話しているのです。

今度は、主人公自身や、主人公との日々について述べる」

貴方は私にとって……本当にお姫様みたいな人だった。

出会ってすぐの私の。決して一般的とは言えない治療を、心から了承してくれた。
私が間違いを犯しても、すぐに笑って許してくれた。

人間ではない方の私の事まで、受け入れてくれた……。

【※ここからセリフ終わりまで、少しでも泣きそうになっていく※
これまでの半月は、ミネルヴァにとってあまりにも幸せで、かけがえのない日々だったので。

しかしこの日々について疑問を感じていたのも事実なので」
貴方との日々は、どれも、とても幸せで。

貴方が、心と身体の全てを使って、私を受け入れてくれてる事が伝わってきた。

【少し間をあけてから。

勇気を出して切り出す。

これまで言えなかった『自分たちの関係はおかしい』という事について、述べ始める。

『欲望をぶつける』とは『衝動の赴くままにセックスする』という意味』

……でも。貴方と過ごしながら。

私はこうも思っていたの。

『そんな貴方に、私は何をさせているのだろう』って……。

貴方は未来ある、とても有望な方。

なのに私の指示と言えば、簡単なお手伝いばかり。

貴方の本来の研究とは程遠い、基礎的な作業ばかり。

貴方の事が、好きで。好きで。

誰よりも大切にしたいのに……一緒にいれば、ただ、欲望をぶつけるばかり。
日毎（ひごと）、貴方に申し訳なく思う気持ちが強まっていった」

〈主人公〉

「……………」

▲ ボイス加工あり

〔1メートルほど離れた位置から聞こえる〕

● 正面 50センチ

「【※大きく息を吸ってから※ 話す。

涙声になっているのを抑えて、再び落ち着いて話したいので。

つとめて落ち着いた様子で。

『今私が泣くのはおかしい。本当に泣きたいのは、主人公さんの方なのだから』という
気持ちで耐える」

……そんな時に、魔法薬学試験の事を思い出したの。

この試験の肝は、推薦者が必要な事。

貴方がその点で躓（つまず）いて、また、課題薬を作る時間のなさもあって、受験を諦
めている事はわかっていた。

「少し間をあけてから。

声がワントーン下がる。

自分自身最善とは言えない考えを実行しようとした事を述べる」

……じゃあ、私はその両方を解決すればいい。

貴方なら受験資格さえ得れば、きっと合格できる。

だったら私が推薦人になって。間に合わなかった課題薬は代わりに作る。

そうすれば貴方は、未来への足がかりを得られる……。

本気で、そう思ったの」

〈主人公〉

「……そう、だったのね……」

▲ ボイス加工あり

「1メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 50センチ

「泣きそうな声になるのをこらえて。

申し訳なさそうに自嘲する。

以前、せっかく主人公が『ミネルヴァは悪い魔女ではない』と言ってくれたのに、その

言葉を裏切るような事をしてしまったので」

私はやっぱり悪い魔女ね。

あんなに一緒にいたのに、貴方の気持ちをちっとも考えられなかった。

また、過去と同じ失敗を繰り返したの。

嫌われて当然だわ。

【※大きく息を吸って吐いてから※ 話す。

覚悟した、落ち着いた声になる。

これまでの行いを短く振り返った上で、改めて主人公に謝罪する】

……私からの申し開きは以上です。

私のやり方は間違っていた。

貴方を傷つけて、他の方々まで巻き込んで。

貴方に、そんな顔をさせる程の。

誰も幸せにならない事をしようとした。

本当に、申し訳ない事をしたと思っている。

【※こらえきれなくなったように、泣きそうな声で※

自分はまだ感情を出さず、主人公の言葉をただ黙って聞いて、受け入れようとしたのに、できない。

あれだけ『無感情』『気持ち表現する事が下手』と言われたミネルヴァだったのに、こ

れだけは我慢できないし、隠せない。

その位、伝えたい大切な事があるので」

……でも……」

〈主人公〉

「！」

その時、ミネルヴァが椅子から立ち上がった。

主人公が思わず見上げると、そのまま、主人公の方へ歩いてくる。

SE 25 ミネルヴァが椅子から立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

SE 26 ミネルヴァが主人公のところへ向かう足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

ぽかんと見上げる主人公の前に、ミネルヴァが立ち、膝をつく。

SE26 ミネルヴァが床に膝をつく音

【最初から最後まで流す】

そして、椅子に座ったままの主人公と目線を合わせ……涙ながらにこう言った。

●正面 50センチ

「【今にも泣きそうな声で。

決して大きな声ではないが叫ぶように。

三日前、どうしても言いたくて、でも言えなかった事を口にする。

『内は主人公の発言の引用なので、一人称が『わたし』になる。

トラック05とは逆の構図になる。

トラック05では、自身を『悪い魔女』と自虐したミネルヴァに主人公が怒り、涙する展開だった。

しかしここでは、自身を『もう終わった人間』と評した主人公にミネルヴァが怒り、涙する構図になるので』

貴方には諦めて欲しくない。

『今の暮らして十分』なんて。

『わたしはもう終わった人』だなんて仰らないで。

貴方という素晴らしい人の事を、そのように仰らないで……！」

〈主人公〉

「……ミネルヴァ……！」

SE 27 ミネルヴァが床に膝をつく音2

【最初から最後まで流す】

ミネルヴァが、床に膝をつく。

そのまま静かにとめどなく涙を流し、それは彼女の服へと、地面へと落ちていく。

声の距離が『正面50センチ』から『正面50センチ 下30センチ』になる。

● 正面 50センチ 下30センチ

「【小さな声ですすり泣く。】

自分でも、なぜこんなに涙が出るのかわからないほど泣いてしまう。

しかし、そのうち、トラック05でなぜあんなにも主人公が怒ったのか、その理由をよ

うやく理解する。

当時の主人公は、こんな気持ちで泣いていたのかと思うと、主人公の優しさと愛情に、ますます涙が出てくるので」

……っ。

うっ。うっ。ううっ。

うううっ……」

SE 28 主人公が椅子から立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

主人公、そんなミネルヴァに顔を上げてほしくて、自分も立ち上がり、しゃがみこんで、目線を合わせる。

そして、必死に声をかける。

ようやく声が出せるようになった気分で、必死に話しかける。

SE 29 主人公がミネルヴァの背中を、ぼん、ぼんと叩く音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……ミネルヴァ。ミネルヴァ、どうか顔を上げて」

声の距離が『正面50センチ 下30センチ』から『正面30センチ』になる。

● 正面 30センチ

「涙声で自嘲気味に笑って。

主人公に優しく背中をぼんぼんされながら。

目に涙を浮かべて微笑みながら、後悔の気持ちを述べる。

もしこれができていれば、主人公たちにここまで迷惑をかける事もなかったので。

『三日前』とはトラック06の事」

……はあ。

三日前。これをちゃんと言えたらよかった。

そうすれば、このような事にはならなかったのにね……」

〈主人公〉

「……それは、違うわ」

●正面 30センチ

「涙声で、虚をつかれたように。」

『主人公さんが何を言っているのかわからない』という感じで「え?」

SE30 主人公がミネルヴァを抱きしめる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「ごめんなさい。」

わたしが間違っていたの」

この瞬間まで、主人公は声を忘れた生き物のようだった。

正確には、あまりにも複雑な思いが胸で絡まったまま、言葉として出力されない状況にあった。

でも、今、やっと話す事ができた。

どうしてもミネルヴァに伝えなくてはならない事。それが、やっと声になった。

主人公が抱きしめた事で、声の距離が『正面30センチ』から『右0センチ』になる。

● 右 0センチ

「〔涙声で尋ねる。〕

主人公が謝る理由が見当もつかないし、そもそも、謝る事は何一つないと、すでに伝え
たはずなので」

……なぜ、貴方が謝るの？

貴方が申し訳なく思う事は何一つないと、お伝えしたはずよ？」

〈主人公〉

「いいえ。あの時のわたしは、あなたからの慰めを期待していた。

わざと自分を悪く言う事で、あなたの同情を誘おうとした。

挫折したかわいそうな女の振りをすれば、あなたが優しい言葉をかけてくれると思った
の。

わたしのそのような甘えが、あなたをそんなにも悲しませてしまった。

わたしが間違っていたわ。

本当にごめんなさい」

● 右 0センチ

「※息づかいのみ※ で表現する。

この話題が来る事自体は予想できていたが、それでも驚いてしまう感じで……！」

〈主人公〉

「それだけじゃない。

あの時、わたしはあなたの言葉を遮った。

……ごめんなさい、あんな事をされて、とても驚いたでしょう。

『どうして？』って思ったわよね。

理由を聞けなくて、心配になったわよね……！」

ミネルヴァ、その言葉を受けて、主人公の正面に向き直る。

声の距離が『右0センチ』から『正面30センチ』になる。

● 正面 30センチ

「※話すスピードは変えずに※

涙声で自分の意見を述べ、必死に反論する。

この期に及んで自分が悪いと言い張る主人公の味方がしたいので」

……うん。貴方は悪くないわ。

あの時、私が急にあんな事をお尋ねしたから。

貴方が咄嗟に『話したくない』と仰って。

お話を切り上げようとしたのだって、何もおかしい事ではないのよ」

〈主人公〉

「うん。わたし達、同じなの。」

あなただけが悪いなんて事はないの」

●正面 30センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。主人公の優しすぎる言葉に、声を失ったので」
……っ」

〈主人公〉

「沢山心配をかけてごめんなさい。

わたしも、あなたの事が好きなのに。誰よりも、大切なのに。

あなたを傷つける事をしてしまった。

本当にごめんなさい」

● 正面 30センチ

「【小さな声で、すすり泣く。

また涙が出てしまう。主人公があまりにも優しいので」

……っ。

うううっ……」

〈主人公〉

「今まであった事、これからの事。

うまく話せなくて、ごめんなさい。

これからは……ちゃんと話すから」

● 正面 30センチ

「【涙声で続きを促す。

主人公の言葉を、一つも漏らさずに聞きたいので」

……うん」

〈主人公〉

「今すぐは……難しいかもしれないけど。まだ辛くて、言葉にできずにいる事もこれから、ちゃんとお伝えするから」

● 正面 30センチ

「【涙声で続きを促す。

先ほどより一段階泣きそうになって。

主人公の言葉を、一つも漏らさずに聞きたいので」
うん……」

〈主人公〉

「だから……あなたさえ許してくれるなら。

いつものわたし達に、戻りたいの。

仲直りを、させていたadakきたいの」

● 正面 30センチ

「【涙声で深く頷く。

先ほどより一段階泣きそうになって。

主人公の提案に、すぐにでも賛成したいので」

うん……！」

すべて言い終えて、やっと元の自分達に戻れる気がする。

あの日の主人公は間違っていた。

ミネルヴァに甘えなくて、現実と向き合いたくなくて、自分の境遇を盾にして逃げた。それをきちんと謝って、ようやく、主人公はミネルヴァの顔が見られる。

だって、自分と違ってミネルヴァは——すべて、主人公のために行動してくれたのだから。

そんな彼女の想いに報いれない事を申し訳なく思いながらも、主人公は彼女と生きていきたいと思っているのだから。

● 正面 30センチ

「【※話すスピードは変えずに※

泣きながら、主人公の提案に応じる。

ミネルヴァからすれば、そもそも主人公は何一つ悪い事をしていないし、罰されるべきは自分だけなので。

であるにもかかわらず自分にも責任があると言い、仲直りをしようと言ってくれる主人公の気持ちに少しでも早く応えたいので」

勿論よ……。

私は最初から、一つだって怒っていない。

貴方は何も悪い事をしていないのですから。

【改めて謝罪する。

主人公は自分達はおあいこと言うが、ミネルヴァとしては、どうしてもそうは思えない。なのでもう一回、自分はきちんと謝るべきだと思っているので」

沢山勝手な事をして御免なさい。

貴方を悲しませて、御免なさい。

【※大きく息を吸ってから※ 話す。

涙声で、でも、少し明るい声になって。

正直な所、まだ自分を許せるわけではない。

だがそれでも『ミネルヴァを許す』という、主人公の想いに応えたいので」

……私も、貴方さえ許して下さるのなら、仲直りがしたい。

いつもの私達に戻りましょう。

【恐る恐る、そっと提案する。

仲直りの証として、主人公とキスしたいので」

……キス、してもいい？」

〈主人公〉

「……ふふ。

初めての時は、聞かなかったくせに？」

笑いながら言えば、ミネルヴァの吐息が近づく。

『確かにそうだった』と言わんばかりに、くすくすと笑い声が降る。

● 正面 30センチ

「涙声で微笑む。

主人公のこの言葉で、やっと笑顔を取り戻す。

それから『確かにそうだったわ』と思い出し、当時の想いを述べる」
ふふ……。

そうね。

初めての時は、もう、治療の事で頭が一杯で。
キスしていいか、お尋ねするのも忘れていたわね。

【少し間をあけてから。

涙声で、優しく尋ねる。

主人公が軽口を叩いた事で、本当に主人公が許してくれて、元の関係に戻ろうとしてくれている事がさらに伝わってきたので」

……だから、今日はちゃんと聞くわ。
キスしてもいい？」

〈主人公〉

「……うん。して。わたしも、あなたとキスしたい。
キスして、仲直りしましょう……？」

●正面 30センチ

「涙声で微笑む。

こんな自分さえ許してくれる主人公の事が、いとおしくて仕方ないという感じで」
ふふ……♡ 可愛い方」

ミネルヴァ 『正面30センチ』から『正面0センチ』に近づきながら話す。

そして、二人は……初めてのあの日のように、そっと唇を合わせた。

● 正面 30～0センチ

「※近づきながら※ 話す。

キスの予備動作」

んっ……。

【※1回※ キスする。

一回だけ、触れるだけのキスだが、とても気持ちのこもった優しいキス
ちゅ♡
」

〈主人公〉

「……好きよ、ミネルヴァ。

わたし、あなたの事、大好き」

● 正面 0センチ

「【涙声で、とても幸せそうに。

主人公の言葉に応え、自分の気持ちを伝える】

大好きよ……。

私も、貴方を愛してる。

【※1回※ キスする。

一回だけ、触れるだけのキスだが、とても気持ちのこもった優しいキス
ちゅ♡「

ここでフェードアウトして終了。